# ヨーロッパにおけるフットボールの発祥の由来について

## ——ハイナー・ギルマイスターの学説を手掛かりとして——

中　房　敏　朗

## Ⅰ．緒　　言

フットボールの歴史にはいまだ明らかでない事柄が少なくない。そんな未解明の事柄のなかでもとくに議論の多い問題のひとつが，やはり起源の問題であろう。本稿ではこの分野で近年著しい成果と進展を見せているハイナー・ギルマイスター (Heiner Gillmeister) の学説[1]を手がかりとしながら，ヨーロッパにおけるフットボールの発祥の由来について考究することにしたい。

## Ⅱ．近代フットボールの原型
## ——民俗フットボール

サッカーやラグビーといった近代フットボールの発祥地は，周知のようにイギリスである。イギリスでは，無秩序で乱暴な古いタイプの球技が古来より行われていた。この球技の記録が初めて現れたのは，14世紀であった。1314年にロンドン市長が「市中に大騒動が起こる」という理由で市内でフットボールを行うことを禁じる布告を発しており[2]，この布告がフットボールの存在を示すイギリス最古の記録とされている。いっぽう，地域社会の一行事としてフットボールの試合を毎年特定の祝日に——その大半は教会暦でいう「告解火曜日(Shrove Tuesday)」に——実施する町や村も少なくなかった。古くは，チェスターで毎年行われていたフットボールにまつわる慣例が1533年に一部変更になったという記録があり[3]，当時すでにフットボールが同市の民俗行事として定着していたことがわかる。現在の多くのスポーツ史研究者[4]は，この種の伝統的なフットボールこそ，現在のサッカーやラグビーの原型であると考えている。こうしたフットボールはイングランドのみならず大ブリテン島のほぼ全域と周辺諸島嶼の一部までひろがっており，少なくとも70カ所を越える町や地域で行われていたことが立証されている[5]。

試合はときに町の街路を利用して縦横無尽にくりひろげられ，また数百人という群衆によって行われた。そのため，後代の人びとはそれを「ストリート・フットボール(street football)」と呼んだり，「マス・フットボール(mass football)」と呼んだりした。それはまた，ある種の社会的意味[6]をもった民俗行事として地域のなかに深く根を下ろしていたので，近年では「民俗フットボール (folk football)」と呼ばれることが多い。フットボールの起源をたずねてゆくと，どうしてもこの民俗フットボールにたどりつくのである。

民俗フットボールがサッカーやラグビーの原型であるといっても，こんにちの近代フットボールとちがって原則的に何をしてもいいという荒っぽい集団競技であった。この粗暴性という際立った特徴はじつは民俗フットボールばかりではなく，その他の様ざまな場面で娯楽や気晴らしとして行われたフットボールにも共通した特徴であり，14世紀以来くりかえし現れる過去の記録や文書に一貫して「暴力的」「粗暴」といった表現を認めることができる。民俗フットボールの試合では，じっさい敵味方が激しくぶ

つかりあい，ボールを追って家屋の窓や壁をこわしたり，相手を蹴ったり殴ったりと，たいへん危険な行為が頻発した。また，ボールやゴール，それにルールなどが各地域によってそれぞれ異なっていたという点も，すでに先学が指摘している[7]。なにしろ工業化以前の社会では風俗や習慣が強固でしかも地域差が大きく，そうした各地域の特殊な条件が競技の方法や様式をつよく支配していたからである。したがって，ひとくちに民俗フットボールといっても，ただたんにボールを蹴りあう単純なものから，比較的複雑な伝承のルールや約束ごとをもつ，競技としてかなり発達したものまで存在したのである。ただし，あらかじめ一定のゴールを設定し，そこにボールを持ちこめば勝利となるという競技を構成する最小限のプロットについては，少数の例外[8]もあるとはいえ，ほとんど大きな変化がなかった。この不変のプロットこそ，民俗フットボールからこんにちのサッカーまでつらぬくもっとも重要な競技の要素であるといってよいだろう。

## Ⅲ．ヨーロッパ中世で発達したチーム・ゲーム ——「パダルム」

こんにちのサッカーやラグビーのルーツはイギリスの民俗フットボールである。これが現在の通説であろう。ところが，この通説を根底からゆさぶるある学説が近年になって立てられた。言語学・中世文学者にしてテニス愛好家であるハイナー・ギルマイスターが，緻密な理論と豊富な史料をもってつぎのような議論を展開したのである。

中世のフランスで城塞[9]をめぐる攻防戦をモデルにした「パダルム(pas d'armes)」という競技が騎士のあいだで発達した。「様式化された戦争」ともいえるこのパダルムをさらに追体験するために「スール(soule, choule)」[10]（フランスの民俗フットボール）やテニスが考案された。一定のゴールにボールを持ちこめば勝利となるというフットボールのもっとも重要な特徴は，じつは「パダルム」の試合でもっともエキサイティングな城門を奪取するという場面をなぞったものだったという。スールはのちに，時期は確定できないがおそらく13世紀中頃以前にフランスから北上してイギリスで「フットボール」となり，かたや南下したものがイタリアで「カルチョ(calcio)」[11]となった。したがってフットボールがほんらい粗暴であったというのも，ゴールにボールを到達させるという最終目標も，じつはすべて騎士の集団競技「パダルム」から取り入れた要素であったという。

ここでパダルムという競技について簡単に説明しておきたい。日本ではスポーツ史研究者にとってもあまり聞きなれない競技であるが，英語では「パス・オヴ・アームズ(pass of arms)」という[12]。パスとは「通路，狭い道」という意味で，アームとは「武装する」を意味する。あえて訳してみるならば「武装しての隘路攻防競技」とでもなろう[13]。ギルマイスターはその発祥時期についてとくに触れていないが，ヨーロッパの馬上試合はだいたい11世紀中頃に始まったと考えられているので[14]，パダルムもその頃に発達したと考えていいであろう。これはヨーロッパ中世の騎士の馬上試合として有名なトーナメントやジューストの先行形態とされる競技であり，鎧や剣で武装した騎士が攻め手と守り手にわかれて橋や城門といったせまい陣地の支配権をめぐって戦った。その試合の様相はまさに「マス・フットボール」を想起させる非常に激しいものであった。

こうした戦争さながらの激しい競技からトーナメントやジューストをはじめいくつもの変形が生まれたが，なかには地域住民が二手に分かれて戦うという点で，フットボールとの関連が想定される興味ぶかい集団競技があった。エンドレイとゾルネイ (Endrei, W. and Zolnay, L., 1988)[15]によれば，異なる地域の住民が棍棒と楯をもって特定の場所を奪取しようと戦うまるで市街戦のような「マッザスクド(mazzascudo)」[16]

と呼ばれた競技があった。また，橋の占領を目的とする一種の橋取り合戦，「ジョコ・デル・ポンテ (giocco del ponte)」[17]という競技もあった。フィレンツェからピサへ流れるアルノ川沿いの町[18]では，住民が川の北側と南側に分かれて対戦したという。地域住民としての意識や感情がまさにこうした集団競技をとおして発露されたのである。どこに住んでいるかによってチームを区分するこうしたチームの編成方法は，フランスのスールやイギリスのフットボールでもたびたび認められたことであり，ここに両者の影響関係が示唆されることを指摘しておきたい。

## Ⅳ．フットボールに息づく「パダルム」の痕跡

フットボールとテニスには共通の起源があった。それが騎士の馬上試合「パダルム」である。じっさい，フットボールやテニスから，往時のパダルムの痕跡がいくつも認められるとギルマイスターは主張する。[19]

たとえば，12～13世紀の記録[20]をみると，パダルムは婚礼と結びついて語られている。婚礼とのつながりは，じつはイギリスのフットボールでもイタリアのカルチョでも確認できるのだ。その習慣は文献上では1409年のロンドンの布告に言及されたものまで遡ることができ，[21]地理上ではイングランドの北部と南端部，さらにフランス北部，ドイツ北部，スカンジナヴィアとひろく分布している。[22]結婚式の余興は，その日の思い出を列席者の胸に刻みつける効果を高めるというねらいがあった。[23]そこで騎士は馬上試合を披露し，貧しい民衆はそれに似せた球技を行ったのである。さらに，フットボールには山チームと谷チームに分かれて対戦するものがあった。[24]これはパダルムの攻撃側が山すそに位置しなければならないのにたいして，守備側は高い場所を占めるという古い観念の反映であったという。

つぎに，試合前の掛け声である。テニスということばの語源は古フランス語の「tenes（とれ，守れ！）」であり，試合前の掛け声に由来する。[25]ギルマイスターによると，この表現もやはり馬上試合から借りた用語だったという。馬上試合では対戦者にまずこのことばを発して，これから迫る攻撃に備えるようにうながしたのである。驚くことにフランスのスールでもこの用語が使われたらしく，「トゥネ (Tenez)」という掛け声のあとに試合が始められる15世紀の作品中の描写が，証拠として示される。[26]なおまた，こうした軍事用語から借用された他のフットボール用語の例として，イギリスのイースト・アングリア地方で行われていた民俗フットボールのひとつ「キャンプ(camp, camping)」に注目する。「camping」という名称はもともと戦うこと(to fight)を意味する古期英語「campian」に由来し，ここにフットボールの軍事的な特徴がじつによくあらわれているとギルマイスターは主張する。[27]

いっぽう，イタリアのカルチョもまた，婚礼のおりに行われることが多かった。上述したように，この点でもやはり「パダルム」と共通する。『球戯論』（1555年）を著したスカイノ(Antonio Scaino)によれば，標示してある区域のなかにボールを入れると得点となり，これを「cacciar la Palla（ボールをカッチアする）」といった。[28]この「caccia（狩り，追撃）」こそまさに馬上試合の用語であった。さらにこの「caccia」というイタリア語が明らかにフランス語「シャス(chasse)」からの借用語であるという点にも注意しておきたい。ここから，カルチョがフランスから移入した文化の要素をもつということが示唆されるからである。

## Ⅴ．フットボールのイギリスへの伝播

ヨーロッパのフットボールの起源はフランスであると考えるこうした見解[29]は，じつをいうとギルマイスターのオリジナルではない。だが，その明確な根拠を最初に提示したのが，かれであった。かれは「スール」の語源を追究するこ

とによって，イギリスのフットボールがフランス起源であるという一根拠を明らかにしたのである。

スール (soule, choule) の語源は何かという議論はこれまでもあった。たとえばマープルズ (Morris Marples, 1954年) は，その語源はラテン語の「sol (太陽)」であり，かつてこの球技が太陽信仰と関係があったことを示唆すると考えた。[30] あるいはまた，「soule」はラテン語「solea (人の足の裏)」に由来し，ボールを足で操作することと関連していると説いた先学もいる。[31] しかし，いずれの説も言語学における音韻法則をまったく無視しているとギルマイスターはいう。

かれによれば，音韻法則上考えられる唯一の語源は，ラテン語の「cepula (たまねぎ)」であり，それはボールを意味する俗語表現であった。これは今世紀のアメリカの野球選手がボールのことを「apple (りんご)」と呼んだのとよく似た類推であるといえる。[32] この「cepula」ということばから“u”の前にある唇音の“p”が脱落し，この語がフットボールという意味にも使われてフランスの中部で「soule」となり，北部で「choule」となった。これはラテン語の“e”の前にくる子音の“k”(この場合は“c”)の発音が地方によって異なり，中部地方では [ts] (のちに [s]) と発音され，北部地方では [tʃ] と発音されたために起こった変化であったと考えられるという。[33] 北部方言の「choule」はさらに綴り字をかえてイギリスへわたり，中期英語の「chulle (フットボールをする)」になっている。マグーンによると，その初例はジョン・ウィクリフという宗教改革者が1380年頃に書いた説教の一編にみることができる。[34] 従来のスポーツ史研究者はこの「chulle」という英語の重要性にまったく気づいていなかった。[35]

中世のイギリスにはフットボールをするという意味の「chulle」という英語が存在し，その語源は驚くべきことにフランス語の「choule」だったのである。中期英語のなかのフランス北部方言からの借入語というのは，フランス語からの借入でもとくに初期の段階に属しており，だいたいノルマン・コンクェスト(1066年)から13世紀の中頃に入ったことがわかっているという。[36] したがって「chulle」という語も13世紀中頃以前にフランスからイギリスに他の文化とともに入ってきたと想定されうる。このことは，イギリスのフットボールがフランスに起源をもつという上述の見解をまさに裏づけるとともに，その移入の時期についても仮説を与えるひとつの有力な証拠であるといえよう。

## Ⅵ. 結　　語

サッカーやラグビーの起源はイギリスの町や村で行われていた無秩序で乱暴な民俗フットボールである。これが従来の学会の通説であった。しかし，ギルマイスターは，イギリスの民俗フットボールにはさらに古いルーツが存在すると考えた。すなわちフットボールは中世のフランスで騎士の集団競技「パダルム」をモデルにして誕生し，その後イギリスやイタリアにわたって歴史的に発達したと主張したのである。

ギルマイスターの立論は自身も述べるように，見方によっては「大胆すぎる」であろう。人によってはすなおに納得できないかもしれない。とりわけフットボールを構成するあらゆる要素がパダルムに源流をもつかのような議論については，やはり検討の余地が残されているというべきであろう。しかし，われわれはかれの学説を根幹から反論できるような強固な理論も大幅に反証できる事実も，まだほとんどもっていないのである。かれの学説をどのように評価するにしろ，ヨーロッパ中世の球技について考究するさいにかれの学説を避けてとおるようなことはこれから許されないであろう。

## 註

1）ギルマイスターの学説の対象範囲は広い。フットボールをはじめテニスやボウリングやビリヤードといった諸もろの球戯まで議論の俎上に乗せている。本稿では議論の対象をフットボールに限定することにしたい。なお，本稿で参考にしたかれの論文や著書は，以下の5著である。Heiner Gillmeister, 'The Origin of European Ball Games, A Re-evaluation and Linguistic Analysis', in; *Stadion*Ⅶ(1981), pp.19-51; Heiner Gillmeister, 'Die mittelalterlichen Ballspiele: eine Chronologie ihrer Entwicklung', in: *Stadion* X (1984), S.77-94; Heiner Gillmeister, 'Linguistics and Sports Historiography', in; *Stadion*Ⅺ(1985), pp.31-40; Heiner Gillmeister, 'Medieval Sport: Modern Methods of Research — Recent Results and Perspectives', in; *The International Journal of the History of Sport* 5 (1988), pp. 53-68 ; Heiner Gillmeister, *Kulturgeschichte des Tennis*, Munchen, 1990（稲垣正浩・奈良重幸・船井廣則訳『テニスの文化史』大修館書店，1993年）.

2）この布告はマグーンやエリアスらによって引用されている。F.P.Magoun, Jr., *History of Football from the Biginning to 1871*, Kölner Anglistische Arbeiten, band 31, pp.5-6 and note 16（忍足欣四郎訳『フットボールの社会史』岩波書店，1985年，7ページ。一部修正の施された再版が1993年に出た）; Norbert Elias and Eric Duuning, 'Folk Football in Medieval and Early Modern Britain', in; Norbert Elias and Eric Duuning, *Quest for Excitement : Sport and Leisure in the Civilizing Process*, Oxford, 1986, pp.175-6. 原文はラテン語とアングロフランス語で併記されており，H.T.Riley(ed.), *Munimenta Gildhallae Londoniensis*, Rolls. Ser., No.12, London 1859-62, vol.Ⅲ, appendix ii (extracts from the Liber Memorandum), pp.439-41にはアングロフランス語からの英語訳が付されているという。ここで「footballs」と訳されているのは原文で「pelotes de pee」である。なお「football」という英語の初例は14世紀の後半に遡る。マグーンによると，14世紀後半の韻文ロマンス『オクテイヴィアン』に「foteballe」とみえ，またジョン・ウィクリフ(1320？－84年)の英語の説教の一編に「footballe」（これは『オクスフォード英語辞典(OED)』の「chulle」の項にも偶然採録されている）とみえる（Magoun, *op. cit.*, p.8 ; 邦訳，10－11ページ）。またつぎも参照。中房敏朗「"football"という語の初見はいつどこか？」スポーツ史学会会報『ひすぽ No.9・10合併号，1990年，4－5ページ。中房敏朗「イギリス中世のフットボール再考」『スポーツ史研究』第3号，1990年，41－6ページ。

3）ダニエル・キング(？－1664年)という彫版師が書き残したもので，*The Vale-Royall of England*, London, 1656, p.194に引用されている(Magoun, *op. cit.*, pp.101-2 ; 邦訳，154ページ)。

4）日本では，たとえば中村敏雄「サッカーの発展史」日本体育協会監修『最新スポーツ大事典』大修館書店，1987年など。英語圏では，たとえばEric Dunning and Kenneth Sheard, *Barbarians, Gentlemen and Players : A Sociological Study of the Development of Rugby Football*, Oxford, 1979（大西鉄之祐・大沼賢治訳『ラグビーとイギリス人：ラグビーフットボール発達の社会学的研究』ベースボール・マガジン社，1983年）など。ドイツ語圏では，たとえばG.シュテーラー・I.コンツァック・H.デブラー（唐木國彦・長谷川裕・谷釜了正・佐藤靖訳）『ボールゲーム指導事典』大修館書店，1993年，16ページなど。

5）中房敏朗「イギリスにおけるフォーク・ゲームの成立ちとその多様性に関する研究」『スポーツ史研究』第4号，1991年，38－48ページおよび中房敏朗「イギリスにおけるフォーク・ゲームの競技関係者に関する一考察」『仙台大学紀要』第24集，1993年，1－13ページを参照。ただし，実修地の正確な数字はもちろんつかめない。これから研究がすすめばさらに増えることはまちがいない。じじつ，王立コーンウォール博物館には，ハーリング（Hurling, 民俗フットボールの一種）の展示物の説明文に「St. Mellion」や

「St. Agnes」といった町でも行われていたことを示す記述があるからだ。こうした町は従来の研究では，まったく知られていない。現在でもブリテン諸島の12カ所の町でこうした伝統的球技が行われている。中房敏朗「イギリス・オランダ・ベルギー旅日記——フットボールの故郷を訪ねて——」SIESTA発行委員会編『SIESTA』稲垣研究室, vol.2, No.4 (May, 1993), 1－54ページ。なお，スコットランドのカークウォールで行われる「Ba' Game」については，名古屋短期大学の吉田文久氏がおそらく日本人として初めて詳細に現地調査した報告書がある。吉田文久『今も残るストリート・フットボール——"Ba' " Game in Kirkwall——』1993年5月。

6）民俗フットボールの社会的な意味としては，日常的規範の緩和，集団間の敵意表現のメディア，個人間の不和の決着，社会的地位の転倒，共同体的絆の再結束などがある。中房敏朗「前工業化社会のイギリスにおける伝統的球技の社会的機能——R.W.マーカムソンの所論を手がかりとして——」学術シンポジウム『アジア民族体育の現状と未来』(1991年11月6－8日，於上海体育学院）における発表レジュメ。またつぎを参照。Robert W.Malcolmson, *Popular Recreations in English Society 1700-1850*, Cambridge, 1973, chapter 4（川島昭夫・沢辺浩一・中房敏朗・松井良明訳『英国社会の民衆娯楽』平凡社，1993年，第4章)。

7）たとえばマーカムソンや中村が民俗フットボールの地理的多様性について認めている。Malcolmson, *op. cit.*, pp.34-5(邦訳, 79－81ページ）；中村，前掲論文，370ページ。またつぎを参照。中房(1991)，前掲論文。

8）ドーキング(1857－1903)やアサーストウン(1927－)ではゴールはなく最後までいかにボールを保持するかを競い，コーフ・カースル(1551－1966)やバヴィー・トレイシー(1923)では一定の場所へボールを蹴り進んだり，一定の地帯を蹴り回すだけであったが，事例としては圧倒的に少ない（中房(1991年)，前掲論文，40－1ページ)。

9）城塞といっても，バイエルンのノイシュヴァンシュタイン城のような立派なものを想起してはならない。このような城はたいてい近代になって造設されたものだからである。中世の城はたいへん小さい。国王や領主の城はたしかに大きかったが，数はわずかであった（阿部謹也『甦える中世ヨーロッパ』日本エディタースクール出版部，1987年，176ページ)。したがって城門にしろ，その通路にしろ，小規模であるのが一般的であり，城門の攻防戦はかなりの過密状態で混戦が強いられたものと想像される。なおヨーロッパの築城は9世紀に本格化し，12～13世紀に最盛期となった（野崎直治『ヨーロッパ中世の城』中公新書，1989年，33ページ)。

10）スールについて日本語で読めるものでは，ベルナール・ジレ（近藤等訳）『スポーツの歴史』白水社，1952年，57－9ページ（Bernard Gillet, *Histoire du sport*, Collection que sais-je？ N° 337, Paris, 1948, pp.49-51）が比較的詳しい。英語ではつぎを参照。Robert W. Henderson, *Ball, Bat and Bishop : The Origin of Ball Game*, New York, 1947, pp.39-46. フランス語ではジュスランの著書がある。J-J. Jusserand, *Le sports et jeux d'exercice dans l'ancienne France*, 1901 (rpt. : Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1986), pp.265-83.

11）『体操術』を著したイタリアのメリクリアス(Hieronymus Mercurialis, 1530－1606年)は「カルチョ」という名称の由来として，足を指す名詞「カルキオ」からきていると述べている(Raymond Thomas, *Histoire du sport*, Collection que seis-je？ N° 337, 1991, p.47；蔵持不三也訳『スポーツの歴史』白水社，1993年，57ページ)。近世や現在のカルチョについて日本語で読めるものとしては，つぎを参照。D.B.ヴァン ダーレン・B.L.ベネット(加藤橘夫訳)『新版体育の世界史』ベースボール・マガジン社, 1976年, 120－1ページ(Deobold B.Van Dalen and Bruce L.Bennett, *A World History of Physical Education : Cultural, Philosophical, Comparative,* Second edn, New Jersey, 1971, pp.114-5) および細川周平「フィレンツェ・サッカー」浅田彰・伊藤俊治・四方田

犬彦編『GS——特集：POLYSEXUAL＝複数の性』no. 2 Nov.1984. 19世紀末のカルチョの紹介と簡略な歴史については，W. B. Heard, 'Mediaeval Football', in ; *Badminton Magazine*, 1902 vol.XV, pp.410-22があり，これによるとカルチョの歴史は15世紀に遡るという（p.420）。また，イタリア語文献ではカラー図版も豊富な "*FOOTBALL —— I domini del calcio : memoria, cultura, comunicazione*" (Firenze, 1990) がある。

12) 『オクスフォード英語辞典』の名詞「Pass」(s.v. *Pass* sb.[1] 3.b.) の項には「"Pass of Armes"とは，騎士道時代において騎士が守るべき場所，たとえば橋や道路のこと。そこに立ちはだかる防備者と格闘しなければ，そこを通り抜けることができない」という1727－41年の文書が引用されている。またつぎを参照。Van Dalen and Bennett, *op.cit.*, pp.104 and 112（邦訳，112ページ及び119ページ）；奈良重幸「むかし，テニスには「ゴール」があった——テニスの不思議——」中村敏雄編『スポーツ文化論シリーズ② スポーツのルール・技術・記録』創文企画，1993年。なお「パダルム」の英語訳としてギルマイスターは1981年の論文では「pass of armes」としていたが，1988年の論文で「passage of armes」と変更している（理由は不明）。

13) ベルナール・ジレも『スポーツの歴史』で「パダルム」に言及しているが (Gillet, *op.cit.*, p.43)，それを近藤等は「陣地防備模擬戦」と訳している（ジレ，前掲訳書，49ページ）。いっぽう，奈良はパダルムを「武装パス」と訳し，略記して「パス」としている（ギルマイスター，前掲訳書，9ページ）。本稿では「パダルム」と原音表記を原則とした。

14) Van Dalen and Bennett, *op.cit.*, p.103（邦訳，110ページ）.

15) Endrei, W. and Zolnay, L., *Fun and Games in Old Europe*, Budapest, 1986, pp.94-95. またつぎも参照。Van Dalen and Bennett, *op.cit.*, pp. 104-5 and 112-3（邦訳，112ページ及び119－20ページ）.

16) 「マッザ」とはイタリア語で棍棒のこと，「スクド」は楯のこと。なお，スイスには「マッツァ (mazza)」と呼ばれる棒試合がいまも残っているという (Endrei and Zolnay, *op.cit.*, p.94)。

17) 「ジョコ」はゲームのこと，「デル」は英語のオヴ，「ポンテ」は橋のこと。すなわち「橋の競技」を意味する。ヴァン・ダーレンとミッチェルによれば，これは15世紀末から行われているという (Van Dalen and Bennett, *op.cit.*, p.113 ; 邦訳，119ページ)。なお『地球の歩き方：フィレンツェと中世・ルネサンス都市』'93～'94版，ダイヤモンド社，1993年，212ページをみると，この「ジョコ・デル・ポンテ」がいまでも毎年6月下旬の日曜日にピサで行われている。ところで，ここでいうイタリア語の「gioco」と類縁関係のあるポルトガル語の「jôgo」については，ロベルト・ダ・マータによる興味ぶかい議論がある。ロベルト・ダ・マータ「社会の<内なる>スポーツ：国民劇・国民祭としてのフットボール」ヴィクター・ターナー／山口昌男編『見世物の人類学』三省堂，1983年。

18) 同じ川沿いに同様の慣習が分布するというのは，文化の伝播の問題を考えるうえでたいへん示唆的であり，こうした河川の文化運搬機能にあらためて注目しておきたい。日本の例だが，たとえばつぎを参照。地方史研究協議会編『河川をめぐる歴史像：境界と交流』雄山閣，1993年。

19) フットボールとテニスには共通する起源あった，つまり「パダルム」という馬上試合をモデルにして両者が生まれてきたとギルマイスターは考えている。しかし，著書を見ていると，テニスはあたかもフットボールから分岐して誕生したかのような記述がいくつか見られる。ギルマイスターの本意はおそらく「フットボールとテニスには共通する起源があった」と考えていると思われる。にもかかわらず，ところどころで混乱する記述を不用意に書いてしまったのであろう。

20) ギルマイスターは一例として，Horák, W., Hrsg., Lai von Melion, In : *Zeitschrift für roman tische Philologie*6(1882)に依拠しつつ，古フランス語で物語詩を意味する「Lai」という言葉もなかったころの物語詩に出てくるピカルディ地方の騎士

メリョンの婚礼でのパダルムを挙げている。Gillmeister(1990), *op.cit.*, S.17(邦訳, 9ページ).

21) 婚礼の際にフットボールや闘鶏のために金銭を要求する習慣を禁止する布告。Magoun, *op.cit.*, p.11(邦訳, 15ページ)。またマープルズはその原文を引用している。Morris Marples, *A History of Football*, London, 1954, p.34.

22) F.K.Mathys, *Die Ballspiele*, Dortmund, 1983, S. 11-2. および中房敏朗(1991年), 前掲論文, 46ページ, 註26。

23) S・I・ハヤカワ (大久保忠利訳)『思考と行動における言語』第二版, 岩波書店, 1965年, 107ページ。またつぎを参照。Gillmeister (1990), *op.cit.*, S.14-5 (邦訳, 6ページ).

24) ギルマイスターはフットボールに「山チーム Bergmannschaft」と「谷チーム Talmannschaft」に分かれる例があったというが(*ibid.*, S.139 und 326; 邦訳, 139ページ及び309ページ), わたしはまだ知り得ていない。ただし, ウェールズのランウェノグで「高地 Bros」と「低地 Blaenaus」, スコットランドのカークウォールで「上手 Uppies」と「下手 Doonies」, ダーラムのチェスター・ル・ストリートで「上通り Up-street」と「下通り Down-street」といった対戦方法を確認でき (中房(1993年), 前掲論文, 3ページ及び7ページ), これらはギルマイスターのいう「山チーム」と「谷チーム」という対戦方法を類推させる。いっぽう, 「独身者」と「妻帯者」に分かれて対戦するという方法もイギリスやフランスでかなりの事例がみられ, すでに先学がしばしば指摘しているところである。ギルマイスターならこのような対戦方法をどのように解釈・説明するのであろうか。

25) 「tennis」という英語の語源については諸説あるが, ギルマイスターがそのひとつひとつを取り上げて入念に検討している (Gillmeister (1990), *op.cit.*, S.131-51 und 400; 邦訳, 118-39ページ及び361ページ)。かれが最終的に得た結論にこれから異論をさしはさめる余地はほとんどないように思われる。ウィークリー (Ernest weekley) もまた, 掛け声に由来するという語源説を支持している。アーネスト・ウィークリー(寺澤芳雄・出淵博訳)『ことばのロマンス: 英語の語源』岩波文庫, 1987年(原著は1912年), 32～33ページ。

26) *ibid.*, S.150-1 (邦訳, 138ページ).

27) 「camping」の語源についてギルマイスターが依拠しているのは『中期英語辞典 (MED)』である (Gillmeister (1981), *op.cit.*, p.31)。またつぎを参照。OED, *Camp* sb.[1]2, *Camp* v.[1]3 and *Camping* vbl. sb.1; Joseph Wright ed., *The English Dialect Dictionary*, Oxford, 1898, edn. 1923, vol. I, under '*camp*'.

28) Gillmeister (1990), *op.cit.*, S.119 und 319(邦訳, 105-6ページ及び302ページ). なお, フィレンツェのカルチョにかんする最古の論文が1580年に出ているが (Giovanni Maria Bardi, *Discorso sopra il giuoco del calcio fiorentio*, 1580), それによると得点になるのは, 標示してある区域のなかにボールを入れるのではなく, 最後方のラインを通過させることであった(Gillmeister (1990), *op.cit.*, S.319; 邦訳, 302ページ)。

29) たとえばマグーンは, フランス起源説をひかえめに示唆した (Magoun, *ibid.*, p.18; 邦訳, 24ページ)。しかし, 既述のフットボールの存在を示すイギリス最古の記録(1314年)よりも古いとマグーンが考えたフランスの記録 (12世紀, ジュスラン等の著書に所引)は, 決定的なものではないとギルマイスターは批判している(Gillmeister (1981), *op.cit.*, p.27)。その他, ジュスランやマープルズも, フットボールのフランス起源説を示唆している。Jusserand, *op.cit.*, p.275; Marples, *op.cit.*, pp.9-10. なお, スールというフランス語の文献上の初例は1200年前後に書かれた "*Le Roman de Renart*" (日本では『狐物語』の名で親しまれる)に遡り (Gillmeister (1984), *op.cit.*, S. 80), 「la çoule」とみえる。山田爵は仮訳としてこれを「クリケット遊び」としているが (中世文学集II『ローランの歌　狐物語』ちくま文庫, 1986年, 318ページ), この訳はスポーツ史的にみれば明らかに誤りである。

30) Marples, *op.cit.*, pp.12-13.

31) ギルマイスターによれば, Messieurs du Cange

と Siméon Luce の2人がこの「solea(人の足の裏)」説を述べているという(Gillmeister(1981), *op.cit.*, p.29)。また,池上俊一『賭博・暴力・社交：遊びからみる中世ヨーロッパ』講談社, 1994年, 147－8ページにもこうした語源の解説が述べられている。これとは別の傾聴に値する説としてギルマイスターは, 中高ドイツ語の「kiulla (革袋)」に由来するという説を検討しているほか(Gillmeister (1990), *op.cit.*, S.326；邦訳, 309ページ), アイルランド語の「sull(＝fight)」やラテン語の「souiller(＝make dirty)」に由来するといった俗説まで紹介している(Gillmeister(1985), *op.cit.*, p.31)。

32) アメリカで1920年代に選手やマスコミのあいだで使われるようになった (Tim Considine, *The Language of Sport*, New York, 1982, p. 4；稲垣安二監修『アメリカンスポーツ語辞典』雄松堂出版, 1987年, 8ページ)。

33) この類例に「cherry」がある。ギルマイスターによれば, この英語はラテン語「keresia」に由来し, この“e”の前の“k”がフランス中部地方で [ts] と発音され「cerise」となり, 北部地方では[tʃ]と発音されて「cherise」となって, さらに英語の「cherry」になった。ここで英語の「cherry」に語尾の歯擦音“-s”が脱落しているのは, イギリス人がこれを複数形の語尾の“-s”と誤解したためであるという (Gillmeister (1981), *op.cit.*, p.30)。

34) Magoun, *op.cit.*, p.8 (邦訳, 10－11ページ). 『オクスフォード英語辞典』の「chulle」(*chulle* v.) の項によれば, この英語は古期北部フランス語の「chouler」「choller」「cheoller」に由来し, これらの語はフランス中部で「ceouler」「 çouler 」「souler」と, また中世ラテン語で「cheolare」「ceolare」「solere」と綴られたという。ギルマイスターによれば, ラテン語「cepulla」のたどった変化は, フランス北部で「choule (＝football)」＞「chouler (＝to football)」＞「chouleur(＝footballer)」となり, さらに英語の「chille(＝play football)」となった。いっぽう, 中部では「soule(＝football)」＞「souler(＝to football)」＞「souleur (＝footballer)」となったという。なお中部方言の「soler(or soller, souler)」はのちに英語に移入されて「sole」となり (初例は1638年), ボールを投げるという意味で使われている (OED, *sole* $v^2$)。

35) 日本では森が, またイギリスではマグーンが「chulle」の語源について言及しているにもかかわらず, その歴史的な重要性についてはまったく看過している (森龍彦「中世・近世のフットボール」『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987年, 1099ページ；Magoun, *op.cit*, p.8, note 26)。

36) Albert C.Baugh and Thomas Cable, *A History of English Language*, 3rd rev. ed., London, 1978, p.176 (永嶋大典他訳『英語史』研究社出版, 1981年, 169－70ページ) ならびに, R. Berndt, *Einführung in das Studium des Mittelenglishen*, Halle a.d.Saale 1960, p.220 f.に依拠したギルマイスターの論述による(Gillmeister (1981), *op. cit.*, pp.30-1；Gillmeister (1985), *op.cit.*, p.32)。

# The Origin of European Football : A Consideration Based on the Theory of Hiner Gillmeister

Toshiro NAKAFUSA

It is commonly thought that the origin of football in Europe was derived from "*Folk-Football*", which still exist here and there within Britain. But Heiner Gillmeister claimed that Europian football was invented in medieval France and by the lower social classes who had adopted certain principles of "*pas d'arms*", which has been identified as having served as the chief model for football.

His theory may be considerably bold and some do not accept his theory with good grace. But we do not have arguments and facts to completely dismiss his theory nor another strong theory of the origine of Europian football to replace Gillmeister's theory. We should not be permited an intellectual neglect of his theory when we think about the origine of ball-games in medieval Europe, whethere we rate his theory accurate or not.